年間第４主日　１月 30 日　分かち合い

『この聖書の言葉は、今日、実現した』

ルカ 4-21

今年は典礼上C年にあたり、主日のミサでは、ルカ福音書が連続して読まれることになっています。ルカは、なじみ深いイエスの降誕前後の様子を記していますし、神の慈しみの愛を示す印象的なたとえ話をいくつも伝えています。イエスの教え、キリスト教のこころを、わかりやすく語る福音書として、貴重な文書です。

使徒言行録を含むルカ文書の大きな特徴の一つは、キリストの福音が、ユダヤ人世界の中心であるエルサレムから始まって、異邦人の世界、そして、全世界に宣べ伝えられるものだと言う主張です。それが現実のものとなるのは、イエスの復活後、聖霊が弟子たちの上に降り、使徒たちが世界に向かって宣教を始めたことによりますが、その芽は、イエスご自身にあったことも否めません。

今日の福音は、先週に続いて、イエスが故郷ナザレの会堂で聖書を朗読された場面があてられています。先週の箇所は、イエスがお読みになったイザヤ預言者の言葉が中心にありました。「貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれた。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」と。そして、今日の福音はそれを受けて、「この聖書の言葉は、今日あなたがたが耳にしたとき、実現した」というイエスの言葉で始まります。福音が、どこにでも、どんな国、民族、社会にも存在する、貧しい人、貧しいがゆえにいろいろなハンディを負って生きることを余儀なくされている人、様々な理由で囚われ、拘束され、自由を奪われ、非人間的な状況に生きることを強いられている人、そして、目に限らず、様々な肉体的な疾患によって、行動を制限され、他人の援助を必要としている人、そのような人に、自由と解放をもたらす福音が今告げられ、そして、実現するという力強い宣言の言葉です。

それを聞いた人々は「イエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いた」とあります。素直なこころで聞いた人々の反応はそのようなものだったのでしょう。しかし、福音書は続けます、「この人はヨセフの子ではないか」と。「ヨセフの子」、「大工の子」、「マリアの子」、いずれも、同郷の人々がよく知っている、特に、これといって目立つところもなく、自分たちと同じような、貧しい、つつましい生活、労働で身を立てている男が、何を、突然、人が変わったように言い出すのか、という故郷の人々の思いがそこに込められているのではないでしょうか。

イエスは、そうした人々の心を見抜かれます。旧約時代、預言者エリヤが行った不思議、預言者エリシャが行った奇跡、そのいずれも、ユダヤ人の世界を超えた、異邦人の世界、シドン地方サレプタのやもめ、そして、ユダヤ人を軽蔑の目で見下すシリア人ナアマンに対してでした。神の恵みが、イスラエルの領域を超えて、異邦人の世界に及ぶことは、旧約の預言者の意識の中にあったのです。

第一朗読で読まれたエレミヤの預言には、そうした、広い心がにじんでいます。エレミヤは、すでに小さくされた南王国ユダがいよいよ滅亡の危機に直面した時期に生きた預言者です。エレミヤを召された神のことばは印象的です。「母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民

の預言者として立てた」。エレミヤは、ユダの民だけでなく、周辺の国々を含む、より広い世界の中で、神のことばを語る使命を委ねられます。それは、決して、やさしい使命ではありません。身の危険を伴う戦いです。しかし、神は言われます、「わたしは今日、あなたをこの国全土に向けて堅固な町とし、鉄の柱、青銅の城壁として、ユダの王やその高官たち、その祭司や国の民に立ち向かわせる。・・・わたしがあなたと共にいて、救い出す」と。

福音、そして、神のことばは力強く、いのちに溢れ、実現力を伴うものです。しかし、それを語り、それが実を結ぶ過程で、様々な抵抗や障碍に出会うことも避けられません。預言者たちが受けた苦しみ、イエス自身の会堂での経験、そして使徒たちが、宣教旅行の途中で受けた様々な試練はそれを物語っています。そうした信仰の先輩たちが経験した苦しみを通して、わたしたちに福音が伝えられたことを思い、感謝のうちに、その福音を、困難の中にあっても、一層喜びをもって生きることができるよう恵みを祈りましょう。(S.T.)